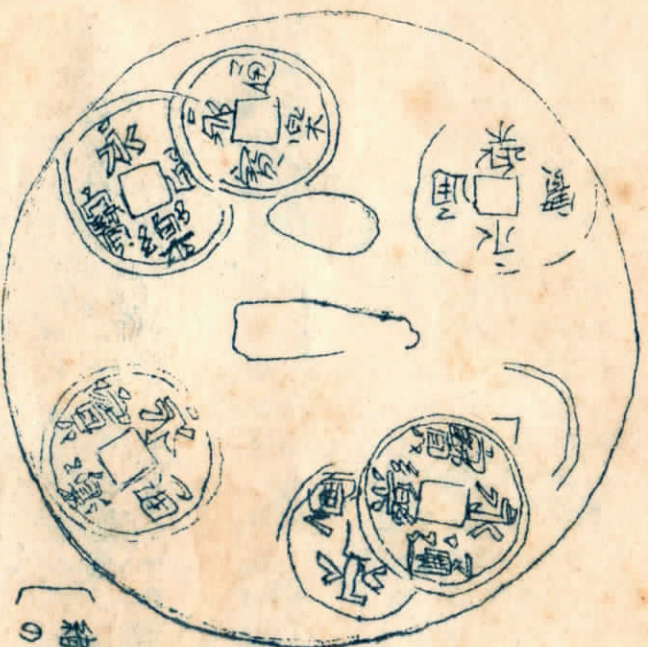


新入生歓迎行事

S,44,4,28.

〔第1回 実地踏査会〕

桶狭間の戦



〔桶狭間の戦の
永通寶の文様〕

名大郷土研究会

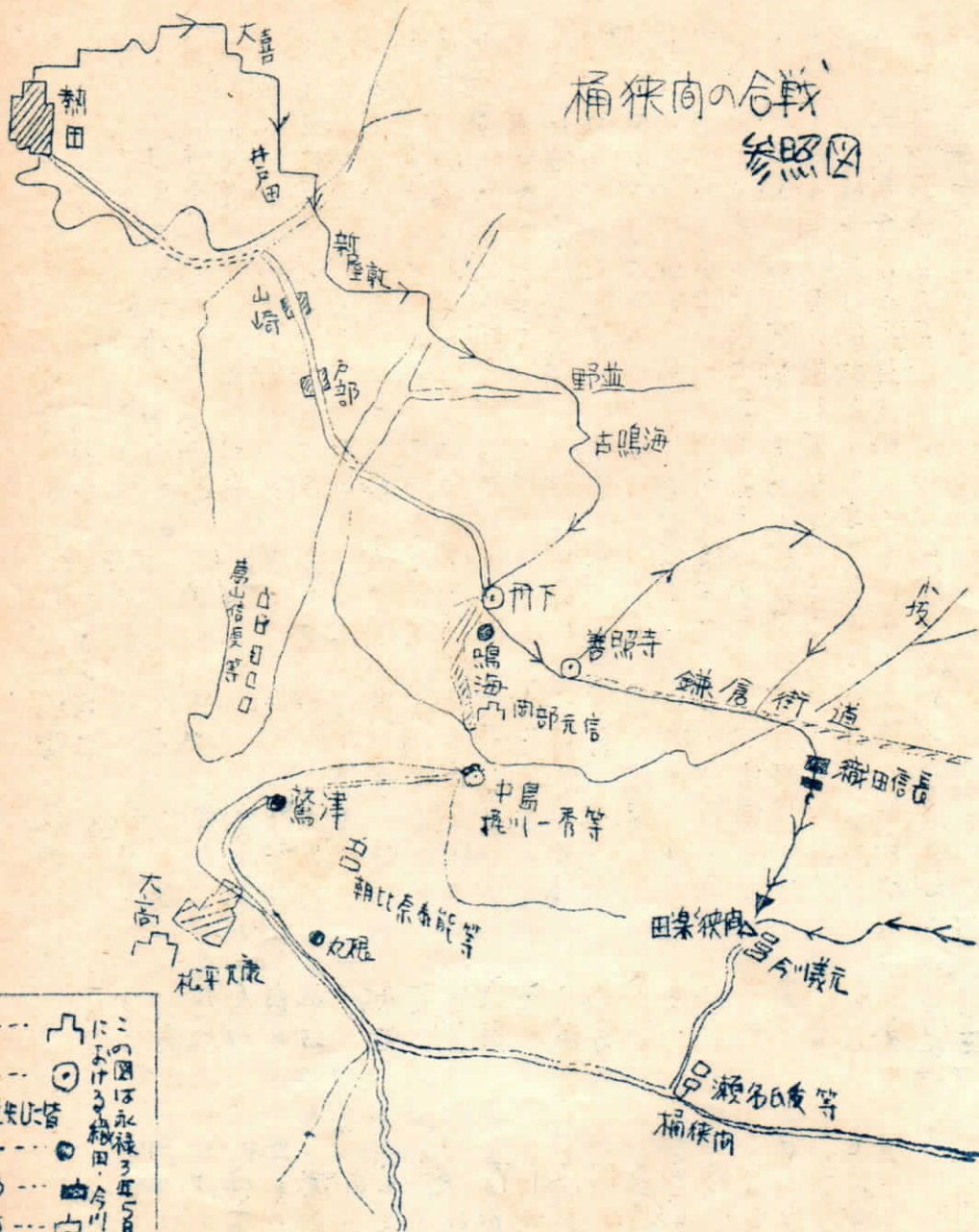
新一年生が希望に燃えて名大の門(?)を往き来するようになり、
なつてからもう1ヶ月近く経ち、学内には新鮮な空気がみ
ななうか。大学は、私達の教育の場である事は、教育基本法の
う民族・地域文化の保護育成の場である。とまで行かなくても、身近
解が郷土研究会は文化の創造と学生にふさわしい手段で、
にありながら未知の物を最も現代人にありがちな精神的、
実践的に把握し、合せて現人といくという趣旨でやって行
地理的故郷喪失感を打破して、この様なサークルの内容を新入生
こうとしておられます。この様なサークルの存在を新入生に
に知ってもらいたい、あわよくば永遠に本会の有為な人材に
なるてもらおうと、一昨年に続き桶狭間の合戦の跡を訪
れる事にしました。
既に御存知の様に、永禄3年(1560年)5月19日
織田信長がわずかな手勢で、田楽狭間に於て今川義元の
大軍を奇襲してこれを打ち破った事はあまりにも有名で
あります。
我々郷研は、あくまでも忠実に忠実に熱田神宮から合戦
場跡まで途中の城・砦跡を見て廻りながら、信長の進撃
コースを徒歩で下どりたいと思います。
出来るだけ食欲に調べ、見直し、そして今回の行事を味
のあるものにしましょう。一般的な概略資料としてこの
抄を作りました。

これから、どしどしこういった実地踏査会をもって
研究したことを、自分達の目で、確かめたいと思って
います。

新入生諸君!

いろいろな機会を利用して、先輩と話し合ひ、
早く我々の郷研のムードにどけ込んで下さい。

桶狭間の合戦 参照図



城 --- 〰️
 砦 --- 〇
 既に焼失した砦 --- 〇
 信長方 --- 〰️
 今川方 --- 〰️

この図は永禄3年5月19日午後一時前後に於ける桶狭間の戦いの状況を示すものである。

◎ 織田・今川両家の沿革

織田家はもとは足利幕府の管領斯波家に仕えてた。斯波家は越前・尾張を所領していた。信長より九代前の常勝の時、始めてその老臣に加わった。しかし敏定の祖父敏定の頃になると、斯波家の勢力が弱まり、敏定が尾張の政治を自由にしようになった。敏定の孫にあたる信秀（信長の父）が、その勢力範囲を広めた。

今川家は足利家と血を同じくし、義元より十代前の吉良国氏が三河国幡豆郡今川荘を領したにはじまる。国氏の子（範国）の代から駿河を領する様になり、範国のオニ子義忠は遠江の守護となった。範国より六代たって義忠が入京し、幕府を護った。その際幕府の命令によって遠江の乱を平定、その帰途に義忠は没した。義忠の孫が義元である。

織田の尾張と今川の駿河との間には遠江・三河の二州がある。この二州の事情が両家の関係に影響を与えていた。まづ遠江は今川仲秋が領していたが、彼が早世して後遠江の諸城主は今川家と織田家に属する事になった。しかし氏親の時、遠江の織田方の諸城主は攻撃を受け今川方となった。一方三河は最初吉良長氏・義継兄弟が領していた。この両家は常に主導権を争っていたが、勢威がふるわず三河の諸城主は今川方につこうとした。そこで今川は自分のものとしてしまおうとしたが、これに逆ったのが松平長親である。今川氏親は松平氏を攻めたが、支配できなかった。つまり尾張と駿河の間に一敵国が出来たのである。しかしノ年がたち松平広忠の時になり、彼が早死にをしたため竹千代が今川に人質となるに及び三河の大半も今川に服属することになった。そしてそれと同じ年織田信秀が没した。だが松平家と異なり信長がすでに成人していたので今川には服しなかった。＊

※そうして義元がすこしずつ織田家の領土に侵略し始めるに
及び、いよいよ両家の戦いの時は熟するのである。それはあ
たかも時永禄三年五月の事であった。

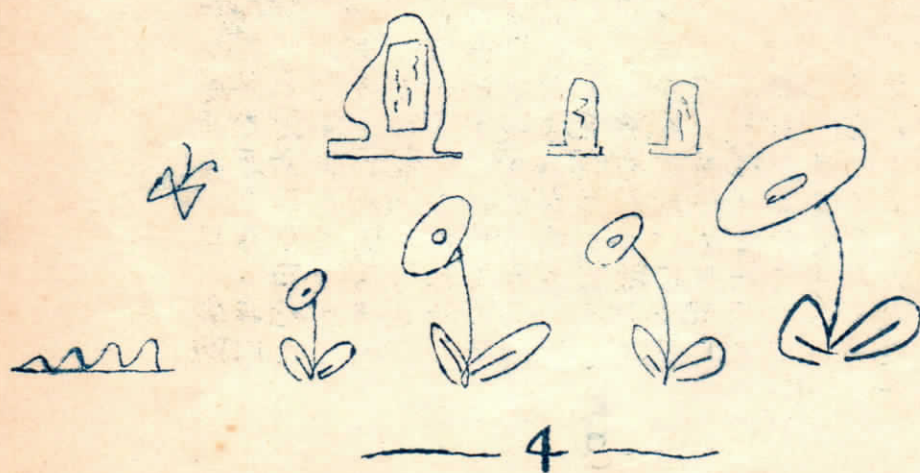
⑩ 両軍の兵力

兵力については文献等で一定せぬが知る手段が無いわけ
ではない。則ち領土からその兵力を指定するのである。
織田家の場合の領土は尾張であるが全部ではなかった。
本来の意味の織田領は尾張の半分もたっていないが、
則ち四十三〜四万石の五万の二とすると約十六〜十七万石
となる。当時は一萬石につき二百五十人の出兵能力があ
るとされているから織田家は40000人内外の兵力をも
っていたことになる。しかし兵力の比較では今川とは戦
うべくもなかったろうが、一方軍紀や訓練がすぐれてい
た。今川家の場合は合計約七十八万石となる。これに尾
張の今川領も入れると百万石以上となるだろう。そうす
ると兵力は二万五千人という事になる。だが名族の今川
家は驕奢に流れてつい柔弱になるきらいがあったのであ
る。則ち彼、今川義元は公卿と真似て額髪も剃らず齒を
黒く染めていたという事である。

⑪ 戦いの経過

都合により省略します。

後で、検討します。(反省会)



◎桶狭間古戦場伝説地

愛知県豊明町大字栄字南館14番外二筆の内

桶狭間合戦は一瞬にして勝敗が決せられたが、史上の意

義は大きい。16世紀の戦国動乱のなかであって駿遠三の三国に強大な勢力をもっていた今川義元は天下を統一しようと永禄3年5月大軍を率いて京都に向って進撃を始めた。これを迎撃つ織田信長は同年5月19日小勢をもって桶狭間で今川の本隊を急襲した。不意をつかれた今川勢は大敗し義元は討死した。その結果織田信長の勢力は急激に拡大し、それが後に天下を統一する政権を樹立したのもこの合戦の勝利がその跳躍台となったといえよう。所以、義元敗死の地は、たしかに記録もなく古くから諸説がある。合戦には桶狭間の名が冠せられながら古戦場としては豊明町大字栄の地があげられている。明和8年(1771)にはその地の人々によって義元の墓碑が建てられ、明治7年山口正義らによって改めて建碑された。昭和12年に文部省へ申請して「伝説史跡」の指定を受けた桶狭間では義元敗死の地といわれるのは田楽坪であると主張している。古くからの主張であって「桶狭間古戦場」文化13年建の標石を先年発見した。ここに今川治郎太輔義元墓があり、その東方に桶狭間矛古碑があり五基の小塚がある。田楽坪はいつしか田楽狭と呼ばれるようになり後耕地となり拡張されてヒロツボと呼ばれている。

◎善照寺砦

緑区鳴海町字砦三七

瑞泉寺の北にあり。永禄2年3月、信長築砦の一つで、特に今川の將周部氏籠る鳴海城に対する意味が強い。信長はこの砦東の間(あわい)にて、これを多追い集る千兵を集結した。僅かに3000。彼が奇襲にうつる直前である。

◎ 丹下砦

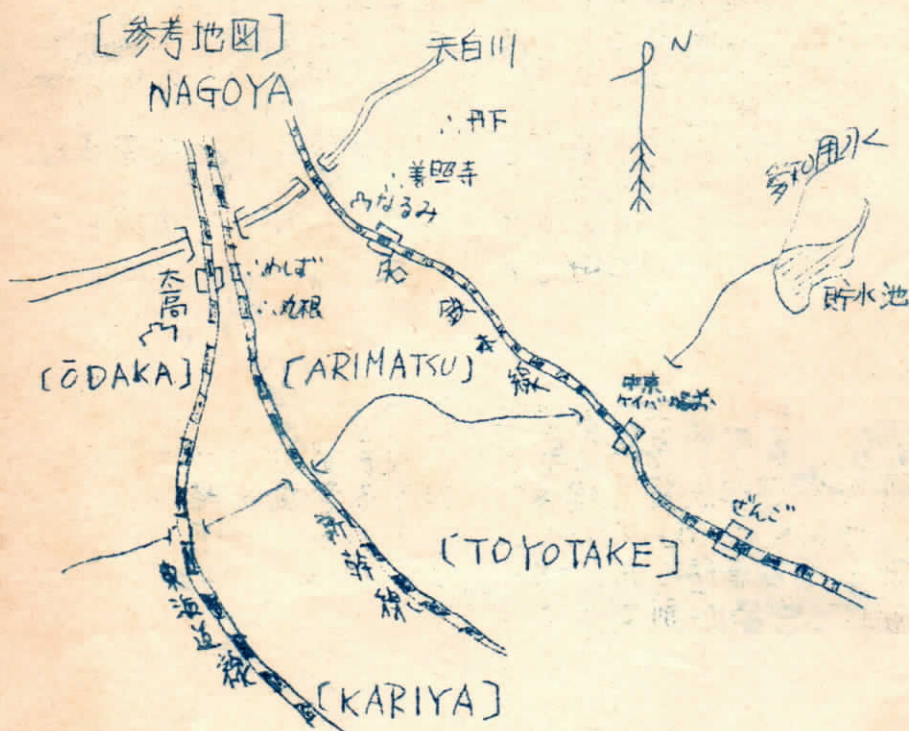
緑区鳴海町字清水寺

永禄2年3月、大高から鳴海にかけて、所々今川氏の
の西上に備えるための一連の砦で、寧ろ清洲のため
の防禦拠点をなすものである。
永禄の時、水野常刀・山口海老之丞・植玄蕃允が
緑 砦を備した。

◎ 中島砦

緑区鳴海町字下中

もと鳴海宿のうち、扇川のほとりにあった。
長さ80間・巾50間
梶川五左衛門尉というのをこの砦の守将とする。



発行所 名人郷土研究会
編集及Cutting 西川 洋

発行日 S44, 4, 29
非売品につき販売いたしません